

第一項 保国会

はじめに

変法運動における学会の役割の一つの事例として、本項では政治的性格の強い学会である保国会の場合を考察して行きたい。

保国会の設立については、清朝が日清戦争に破れたため、ドイツの膠州湾占領以後、西欧列強の中国分割が激化したという背景とあいまって、士大夫層の分割に対する危機意識が増大し、外国の分割支配から中国を守ろうとする意図があった。

このような背景と意図から設立された保国会は、当然、変法運動に深い影響を与えて行くことになるのであり、保国会の究明は、学会運動の性格のみならず、変法運動の性格をも明らかにすることになると考えられる。^①

そこで、以下保国会について考察して行く。考察の順序としては、まず、保国会の設立過程、設立年代、設立場所などを考え、ついでその機能、参加者の階層構成を明らかにし、最後に弾劾による保国会の禁止と保国会の変法運動、学会運動に対する意義を究明して行きたい。

1、保国会の成立

保国会の設置については、知新報の保国会章程の前文に、

1894年遼陽がおかされ、国が危機に瀕し、時局を知っている俊傑は、うれしいなやみ、京師に強学会を創立したが、そしられてやめた。しかし強学会中の士夫は帰って研究を重ねて、近ごろ且に迫って保国の方法を求めて、再び京師に保国会を立てた。この保国会は、憂国のまことであり、天下の人々が参加すべきものであるといっている。^②
とあり、この史料によれば、強学会の意図^③は保国会に継承され、保国会こそは国を愛し国を保つ方法であることが知られるのである。

さらに深くその成立過程について見て行くなれば、梁啓超は「記保国会事」の中で、

北京の士大夫層がすこぶる相応和しており、時は会試の時期に近くて、公車は雲集しているので、御史李盛鐸が康有為と謀って、各省の公車を集めて一大会を開こうとしたところ、康有為はこれを然りとし、これが保国会の議の初めの起りである。……会に到る者は200余人おり、……この日公けに保国会章程30条を擬した。……^④
とある。

また、「書保国会題名記後」には、

戊戌の春、康有為が保国会を北京に開こうとして、まず同僚に知ってもらうために、粵東館にやって来て、立会の主旨を説明し、集って保国の策を謀った。当日集る者は、上は京官からはじめて公車で会議に応じようとする者までに及び、来会者はおよそ数百人であり、彼らが、自らの

利害を度外視して国事をただすことを彼らの任務として考えて行動したのであり、このような盛事は、清朝250余年間、未聞の事であった。^⑤

とあらましを述べられている。

以上が、弾圧された強学会の意図を継承すると考えられる、保国会の設立のあらましであるが、その目的について、より考察を深めるならば、保国会章程の第一条から第10条までにあらまし次のように書かれている。

すなわち、第1条では、国地が日に割かれ、国権が日に削られ、国民が日に困るので、これらを救うためにこの会を開いたのであり、国家の保全をこいねがうので、保国会と名付けたのであるといっている。第2条では、光緒21年5月26日の上諭を尊重し、臥薪嘗胆の思いで、国地、国民、国教の保全をはかれというのである。第3条では保国会の設置は独立国の政権とその土地の保全をはかるためであったというのである。第4条では、中国各民族の自立を保ったのであるといっている。第5条では、儒教が失われないためであるといっている。第6条では、内を治め変法の宣しきを講ずるためであるといっている。第7条では、外交を講ずるためであるというのである。第8条では、朝士が経済学を学び、有司の治を助けるためだといっている。第9条では、会員が、保国、保種、保教を求め、これを論議するのが、この会の目的であるといっている。最後に第10条では会に集う者は、お互いに励まし合って国恥を覚え発憤すべきでありこの宗旨を失ってはならないというのである。^⑥

以上要するに、いかにでもして、中国分割の国恥をはねかえそうとする切実な意図がうかがえるのである。

また梁啓超は戊戌政変記の中で、

この会を開く意は、天下人がみな国恥に発憤し、公車諸士によってこれを摩励し、還って、その郷人を激励して、日本の維新の志士が為した効果をもたらせた。だから一挙に18行省の人心を皆、興起させたのである。^⑦

と述べており、保国会設置の目的は、天下の人々をして国が分割されるという国恥を発憤させるためであったことが知られ、これは結局、清朝18省の人心を興起させることになったというのである。

また前述の「書保国会題名記後」^⑧によっても保国会の目的が中国の国土を保全するためであったことがうかがわれる。

以上、保国会設置の意図について考察したが、それらを要約すれば、保国会設立の意図は中国人が発憤して中国を外国の分割から救い、その領土を保全し、儒教を守り、独立を保ち、自主富強の中国を建設するためであったといえよう。

ついで保国会の設立年代、設立地域について考察して行きたい。梁啓超の「記保国会事」によれば、

康有為は京官の有志の者を集め、李盛鐸は然りと謂はなかったが、後ついに康の議に従い、3月27日粵東会館に在って、第一集した。……^⑨

と見え、康有為や李盛鐸の提唱により設置されたことが知られ、設立年代が、変法の直前の3月27

日であり、⑩ 設立場所は、北京の粵東会館であったことがわかる。同様の事は、前述の「書保国会題名記後」の史料によっても知られる。

まず設立年代について考えるが、これは前年の光緒23年の11月にドイツの膠州湾占領があり、この事に対する反発が激化し保国会というような民族主義的、政治的な学会が生れ、それが、そのまま変法宣布へと時代の流れを前進させたと考えられる。

また北京に設立されたということの背景には容易に官僚が集れる場所であり、丁度会試のため全国の挙人が集って来ており、全国の政治的文化的な中心である北京に後述もするように總會を置き、全国の各省各州各县にその地名を冠して分会を設け、この保国会設立の意図を全国津々浦々にまで流布させようとしたことがうかがわれるのである。また、ここで注目される事は、保国会の会場として会館が利用されていることである。例えば最初の会は北京の粵東会館で開かれており、この事は直接的には、保国会の主宰者が、康有為、梁啓超、麦孟華のような広東省出身であったからであろうが、第2回目の会が貴州会館で開かれていることも合わせ考えるならば、このような会館は、同郷集団の経営になるものであり、これを媒介とする在京の官とその官僚の出身地の地方郷紳との結びつきの深さが考えられるのである。このような会館を拠点にして学会の運動をしているのは、この外にも例があり、⑪ 学会運動が、同郷集団を手懸りとして地方にその運動を進めようとしていたことがわかるのである。また換言すれば中央での学会の運動を地方にまで発展させるためには、どうしても、このような媒介体が必要であったのである。

以上、保国会の設置の意図ならびに設立年代、設立場所などを明らかにした。つぎに、保国会の機能について、考察を加えて行きたい。

2、保国会の機能

保国会には、保国会章程、会講例、応擬之例などがあるのでそれらに依拠しながら、保国会の機能を考察して行きたい。

まず、保国会の組織について明らかにするならば、保国会章程の第11条には、

京師、上海に保国總會を設けてから、各省各府各县に皆分会を設け、地名をこれに冠する。^⑫

とあり、前述もしたように、北京、上海に保国總會を設けて、各省、各府、各县に、その地名を冠して分会を設置するというのである。

保国会總會の役員については、章程の第12条によれば、総理、値理、常議員、備議員、董事があり、会員の推薦によってその役に当たっていたことが知られる。^⑬ 以上の役員が主な役員であったと思われるが、その他にも役員として、章程28条には、商董兼司帳、同30条には、司事、教習、保国会応擬之例2条には筭帳が見えている。

これらの役員の任務のうち常議員、総理、董事については、章程13条から15条までと18条にあらまし次のように明示されている。すなわち、

常議員は会中の事を公けに議し、総理は議員の多数決により、事件の処理、実施を決定し、董事は会中の雑事、入会手続き、文書、会計関係の一切の事を管理し、毎月保国会への寄附金を報にのせる^⑭

とある。また、この外にも章程20条と26条から29条までによれば、総理、値理、董事は、寄附金の伝票に印鑑を押し、来会者の中で不適格者を辞退させ、総理、値理は入会者の合否を決め、値理はその外にも経理に立ち合うことになっており、董事は、商董兼司帳の違反者の罰を議し、経理に立ち合うことになっていたことが知られる。

また商董兼司帳については、28条によれば、書籍の売買や文字の印刷できる者を選び、審査を厳重にして僅かな物でも公正にし、悪い事をする者は、賠償金を課し、罰することが知られる。^⑮

これらの役員の給料については、章程30条によれば、総理、値理、董事などの役員は、義憤により、保国会をはじめたのだから、俸給については議さない。しかし将来において、保国会の財政が豊かになり、専門の人が必要となったときにはじめて給料の事について相談する。その時、給料を貰う者には、撰報、管書、管器、司事、教習、游歴、司帳があげられている。^⑯

分会の入会者については章程16条によれば、各分会が毎月春秋2回、2月と8月に各地方の入会者の名籍をととのえて、総会に送ることになっているのがわかる。^⑰

また各地方の分会の役員については章程17条に、

各地方の会議員は、その他の情形により、分理議員を約7人置く。^⑱

と見えており、大体一地方に7人の分理議員が置かれることになっている。

第19条から第23条には入会手続きなどが次の如くあらまし見えている。

すなわち、入会しようとする者は姓名、本籍、住所、職業を書くことになっており、入会希望者は会員の紹介により、総理、値理に報告され、その入会の合否が決められていたことが知られる。また、たとえ入会しても、心持や品行の面で正しくない所があったり、会の体面を汚すような事があった場合には、除名されることになっていた。また入会者が入会后、会の方針と意見が異なる場合には、その意見を会中に出すことはゆるされたが、保国会の名をみだしたり、混乱をひきおこすことは許されなかった。また、入会者は会を運営するための諸費用の一部として、銀2両を寄附する事になっていた。^⑲

来会者については、章程の25、27条に次の様にあらまし述べられている。

来会者は名位、学業などは問題にしないで、ただその志があれば、会に入れ、相互に徳行は勤め合い、過失はいましめ合い、患難があれば助け合って、自ら教えを保って行こうというのである。また、品行や心持の端正明白な者を会に入れるべきであり、本会がなそうとしている事業は時々、会衆に善悪をたださせて、良い意見は取り入れた方がよく、もし別に意見があったり、いつわりや私をたのみ、奇異な事をほしいままに行う者で、会のさまたげになるようなおそれのある場合は、総理、値理、董事が公けに議して、その者を辞退させるべきである。もしこれをよしとしない者があれば、本会に来

て十分に釈明すれば、寄附の金子は例に照して没収するが、会の去留についてはその者の便利をよく聞くというのである。²¹

また資金面については、すでに、章程23条で見たように、入会者は銀2両を寄附することになっており、また応擬之例4条によれば、寄附金を取ろうとしていたことが知られる。²¹また章程26条には、一般から寄附金をつくる場合の手続きが明らかにされている。²²

保国会の財政、運営面の事については、章程29条によれば、経済的な責任は値理、董事にあり、千数百金以上の場合、全員が集って議し支出することを認めるが、もし収入が多くなれば、豊かな商店を選んで預金をする。預金が多くなれば利息の事について相談し、証票を出す日時を決めて、値理と董事の立合のもとに経理して行く事があらまし述べられている。²³

図書の事については、応擬之例の6条によれば、図書を購入しようとしていたことが知られる。²⁴

最後に、集会の種類ならびに、集会の仕方、集会の実態、会舎について明らかにして行きたい。集会の種類については、章程24条によれば、大会、常会、臨時の会の3種類の別があり、それぞれ会期が異なっていたことが類推される。²⁵

なお、実際の会の持ち方、進め方、議題などについては会講例に精しく規定されているが、さしあたって議題についてのみ触れて置きたい。

即ち会講例の5条によれば、議題は、保国、保教、保民、保種等にしばっていたことが知られる。²⁶

以上のような組織を持った保国会は実際にどのような活動をしたのだろうか。今、史料にも見られる保国会の講演を考察して、その実態の一端を明らかにして行きたいと思う。康有為は、第1回の保国会の講演で大むね次のように言っている。すなわち、

中国は阿片戦争以来英国を中心とする未曾有の外国の圧迫を受け、その状態は丁度4億人の中国人がたおれた家の下か、水漏りのした舟の中か、薪火の上かにいるようなものであり、また籠の中の鳥、釜底の魚、牢中の囚人の如くであり、奴隸となり、牛馬となり、犬羊となっている。しかし中国は元来は、文化の開けた国であり、外国はそれほどすぐれた国ではなかった。イギリスは道光12年に汽車をつくり中国をせめ、中国は、道光20年の戦争（アヘン戦争）、²⁷咸豊6年の戦争（アロー号戦争）等にやぶれたので、曾國藩等が製造局等を開いた。私も甲申事変後、ロシア、日本の侵略にかんがみ、変法を請うたが、気狂あつかいにされた。そして、日清戦争がおこり、日本に敗れるに及んで天下の志士があらわれ、変法の必要性を知ってようやくそれを求めるようになったが、日清戦争後清朝はまだ変法をしてはいない。外国が強いのは、教育をよくし、議院を開いて、上下の者の心を通じているからであり、我が国はそのような事をしないから、最近のように独、英、仏、露、米等の外国から圧迫される事例が20も起ってくるのである。この2月以来外国は、中国を分割しようとしている。中国だけがポーランドやインドなどのように分割されたり滅ぼされたりすることからよく免れ得る事はないのだ。中国の滅亡を救う方法は只一つ、憤憤する事にだけある。日本でも高山正芝^{ツツ}²⁸が出で、変法の行なわれないのを見て憤死したか

ら維新の志士が出て、変法を行い明治維新が行なわれたのである。

中国もじっとしていたのでは滅亡してしまう。しかし、もし4億人の人々が発憤して熱力を持てば出来ないことはない。²⁹

以上からうかがわれる事は、中国人が自国の置かれた状態を良く自覚して、発憤して熱力を持ち、主体的に変法自強すれば、中国は外国の分割支配をはね返して独立富強の国となることができるということである。

また梁啓超は、閏3月1日の保国会開会の大意という演説の中で、大むね次のように云っている。

甲午(1894年)、乙未(1895年)の間では、士大夫層で、中国が危機であることを信じない者が多く、どのようにして、同胞にこの危機を知らせるかを考えた。しかし今年(1898年)になって、膠州湾、旅順、大連、威海衛があいついで、分割され、このようなことが、この1月だけでも20件も見られた。そこで私が北京に行くとき士大夫は、国が瓜分される事を憂え、自分達が奴隷となる事を恐れているが、運を天にまかせて只じっとして分割されるのを待つという状態であった。

しかし、もし同胞に警告を発する事によって、同胞が自覚してよく牙を奮い、爪を張るならば、中国にはなお希望があるだろう。

中国の滅亡の危機は、士大夫層が中国の弱さを知りながらも、なお手をこまねいて、すべき事をしようとしぬ気持にあるのだ。

もし、しばられないのに自分から首をうなだれ、耳をたれて亡びるのを待つならば、孟子の云う自ら禍いを求めるのと同じである。しかし、我々が我が国の滅亡の危機を知って、滅亡しないために皆が自らの能力を出しきって各自がその最善を尽すならば、中国は亡びる事はないであろう。

現在の状態は、口では変法を云うが、各人がそれぞれ責任をなすり合っているようなものである。その上、役人は贈物の競争をして勢力を費やし、自らは何もしないでたらふく食べ、昇進する事を待ち望んで歳月を過している。

しかし、皆が策をあわせて、それを討論すれば、方針が定まり、皆が知識を求めれば知識がなり易く、皆が力を合わせ、お互いの任務を分ち持てば国が治まり易い。それには学会が必要だろうが、皆がこのような気持ちでやれば、鬼神も通してくれたであろう。これが私の気持ちである。³⁰

とあり、梁啓超は、中国弱化の原因を官僚層の意欲や主体性のなさに見出しており、各自が中国の状況を自覚し、責任を持って中国を良くするように努力を積み重ねれば中国は必ず良くなると確信していた事が知られるのである。

さて、この様な会は、前述の2回持たれただけでなく、康有為の自編年譜には、次の如く見えている。すなわち、

25日、再び崧雲草堂に集った。29日には再び貴州会館に集り、人は皆、100人を越えていた。³¹

とあり、25日には、崧雲草堂で、29日には貴州会館で開かれ、いずれも100名以上であった事がうかがわれるのである。

また、このような会を盛んに開くために会舎の必要性も考えられたらしく、応擬之例5条によれば、会舎を求めている事が知られる。³²⁾

以上、保国会の章程、組織、役員、入会者とその手続き、来会者、資金面、図書の購入、活動の実態、会舎の必要性などを明らかにした。つぎに、保国会の参加者の階層構成などを明らかにして行きたい。

3、保国会の参加者

保国会の参加者については、すでに多少触れたが、梁啓超の『戊戌政変記』には、

戊戌の3月康有為、李盛鐸等は共に謀り、演説、懇親の会を北京に開いた。大いに朝士及び公車数百人を集め、其の会を名づけて保国といった。³³⁾

と見え、康有為、李盛鐸の計画により、朝士及び公車、合わせて数百人によって、保国会が開会されている。同様の記事は、『国聞報』の「書保国会題名記後」³⁴⁾や『康南海自編年譜』、『戊戌政変記』の「書保国会事」³⁵⁾にも見えるが、「書保国会事」には参加者は200余人となっている。

また、「京城保国会題名記」³⁶⁾によれば、186名の姓名と貫籍が記されている。

これらの参加者の階層構成を見るならば、前述の『戊戌政変記』の記事にも明らかなように京官や挙人が主であったと思われるが、いま名前の判明している者で、他の学会にも参加し、変法運動にも関係のあった主な者を表示すれば、以下の如くである。

会中の役割	氏 名	出身地	官職（又はそれに代る資格等）
組 織 者	(李 盛 鐸)		御 史
	康 有 為	広 東	工部主事
指 導 者	梁 啓 超	広 東	挙 人
	麦 孟 華	広 東	挙 人
	林 旭	福 建	内閣中書
	張 一 鶚	江 蘇	
	王 鳳 文	陝 西	戸部主事
	李 岳 瑞	陝 西	工部員外郎
	陳 虬	浙 江	揀選知縣（挙人）
	宋 伯 魯	陝 西	山原道監察御史
	喬 樹 楠	四 川	刑部主事
	劉 光 第	四 川	刑部主事（元）
	康 有 為	広 東	工部主事
	楊 銳	四 川	内閣中書
	徐 仁 鏡	河 北	
	文 煥	満 洲	中 允

その派別を范文瀾氏の説に依拠して、②⑦分類するならば、康有為、梁啓超は、変法中間派の康梁系、麦孟華は、変法右派の麦孟華系に、李盛鐸は、頑固派と本質を同じくする仮維新派に属しており、これから見る限り、保国会の組織者、指導者は、変法運動としては、中間派を含め、それより右よりの人々であった事が知られる。

しかし、保国会には、これらの組織者や指導者の外に各地から集った多くの挙人達があり、『康南海自編年譜』にある保国会の集りの記事の中にも、

樓上下は人で皆満ちていた。聴く者で泣く者も有った。……この時には公車は雲の如くであり、來見する者は、日に数十であり、座席はふさがり、応接するのに暇がなく、日夜の力を分ち、各会に行って講じた。客が来て、或いは会うことができず、会っても答礼のために訪問できず、怨む者も多くあった。^{②⑧}

と見えており、多数の挙人の参加や参加者の危機意識や意欲の程がうかがわれ、挙人層の存在は保国会の性格にも大きな影響を与え、保国会をして組織者や指導者の意向を超えた積極的な運動となし得たのだろう。

また、これらの組織者や指導者の官職を見ると、員外郎（正5品）1名、御史（従5品）1名、主事（正6品）5名、内閣中書（従7品）2名、挙人3名、不明2名である。

以上の事から知れる所は、保国会は、中下層の官僚の組織、指導のもとに行なわれたものであり、それを支えるものとして全国各地の多数の挙人が存在したということである。

ついで史料より、知り得る限りでの参加者の出身地を見て行くなれば、陝西34名、広東27名、浙江19名、江蘇17名、四川14名、江西13名、広西10名、貴州9名、雲南9名、直隸8名、山西7名、甘肅6名、福建5名、安徽4名、河南2名、湖南1名、湖北1名であり、陝西、広東、江蘇、浙江、江西、四川を中心に17省にわたっていることが知られる。^{②⑨}なおこの中には山東省出身の者は見当たらないが、山東省の御史をしている者が含まれている。

これから見る限り、保国会の参加者の出身地はほとんど全国の各省にわたっており、その重要性が、各地の出身者によって知られていたということができよう。すなわち、保国会の設立はこのような大きな関心のもとに行われたのであり、このことはとりもなおさず、中国の分割の危機の深刻さを物語っていると云って良いであろう。

以上、保国会参加者の人数、派別、出身階層、出身地などを明らかにした。

4、保国会の禁止

以上考察して来たように、保国会は、強学会の再生として、可成りの地域に展開し、また多人数の人達によって行なわれたが、やがて弾圧されて行くのである。

その理由については、『戊戌政変記』には、

李盛鐸は、榮祿の戒めを受けて名を除き、会に与しなかった。すでに京師では大いにやかまし

かった。この会を開くのは、大逆不道をなすというのであった。そこで李盛鐸は、上奏して会を弾劾した。御史、潘慶瀾、黄桂鋆が之を継いだ。光緒帝は概して問わなかったが、謡言が起り、全都にひろがった。⁴⁰

とあり、李盛鐸は、栄禄の注意を受け、会をやめ、北京で保国会についての議論が盛んとなり、それが大逆不道であるということになると、李盛鐸は上奏して保国会を弾劾し、ついで御史潘慶瀾、黄桂鋆が、弾劾し、これらの弾劾に対して光緒帝は、最初だまっていたようであるが、やがて、保国会を中傷する意見が全都に広がったと述べられている。

また、記保国会事にはこの間の事情が更に詳しく述べられている。すなわち、

洪嘉与と御史黄桂鋆が、保漢会、保浙会、保国会を劾したので李盛鐸も自らに禍いを招くのを恐れ、上疏して保国会を弾劾したのであった。しかし光緒帝が取りあわなかったのも、また潘慶瀾が続いて弾劾し、軍機大臣の剛毅も保国会参加者を取り調べたが、光緒帝は、「今よく国を保つことが、大善でないことがあろうか、それなのに何故、保国会を取り調べるのか」といい、保国会弾劾はついに中止になった。しかし5月には礼部尚書の許应騄が保国会を弾劾し、続いて御史の文倬がまた、康有為を糾劾する長い上奏文を書いたが、そこでは、いつわりがはげしく、保国会の主旨は、中国を保つにありて、大清を守っていないということであり、この上奏こそが、後の戊戌政変の大獄の張本人となったというのである。その後8月になって戊戌政変の後、上諭の中にこの語が引用され、康有為の罪名となり、その他、楊深秀、楊銳、林旭、劉光第の保国会員が罪を得て戮せられる原因となったとあらましいわれている。⁴¹

以上要するに、保国会は光緒帝の保護にもかかわらず李盛鐸、洪嘉与、潘慶瀾、黄桂鋆、剛毅、許应騄などにより中国は保つが、大清は保有しないという理由で弾劾され、政変後、崩壊して行くのであった。

おわりに

以上の考察を要約すれば次の如くなる。すなわち保国会は、ドイツの膠州湾占領後、外国の中国分割の危機の増大の中で、強学会の再成として成立したのであり、その意図は中国を外国の分割の危機から救い、自らの国土を保全するという中国人のやむにやまれない気持ちからでているといえよう。

こうして成立した保国会は、總會、分会、役員などの組織を持ち、また保種、保教、保国のすぐれて、政治的、民族的な章程や詳細な入会、来会の規定を持ち、資金面では会費と寄附により運営し、図書購入をはかり、会舎を求め、積極的な活動を行なったのであり、中国を外国の分割の危機から救おうとした様子が、よくうかがわれるのである。

保国会の組織者、指導者は、中下級の官僚が中心であり、その多くは、変法中間派とそれより、右よりの者から構成されていたが、これに多くの全国各地の挙人層が参加して、積極的な活動をし、その参加者数も数百人或いは200余人といわれ、出身地域もほとんど中国全省に分布していることが知

られる。

しかし、保国会は、李盛鐸、洪嘉与、潘慶瀾、黄桂鋆、剛毅、許应騫などの弾劾により、政変後崩壊したが、すでに述べたように、その意義は大きく、その後の学会、変法運動に大きな役割を果たしたと考えられる。

最後にそれを示す一例として梁啓超の『戊戌政変記』の一部を引用する。すなわち、

而して各省の志士は紛々として繼起して保浙、保漢会等を有した。これより風気は益々大いに開け、士心もまた振励を加えられ、抑遏することはできない。^⑫

とあり、すでに述べたように、保国会開会の意図が、天下の人々をして国恥を発憤させることにあったので、多くの人々の心をとらえ、保国会開会后、各省の志士が続々と起り、保浙会、保漢会などの学会を組織し、これより風気が大いに開け、人々の心も励まされ、変法はおさえるべからざる勢いになったことが知られる。

第四節 ま と め

第四章第一節では、時事的政治的組織の概観を行い、第二節第一項では、時事的政治的な学会である北京強学会を取り上げた。北京強学会では、光緒22年(1896年)北京に設立されたもので、上海強学会をはじめとするその後の諸学会の先駆をなすものであり、変法を意図し、政治的・啓蒙的・学問的性格を包含し、機能も、その後の学会の原型をなすと考えられる。北京強学会の参加者は、6品以下の中下級官僚が多く、派別としては、右派、中間派であり、出身地は、江蘇、浙江、江西にかたよりが見られた。なお、北京強学会は、禁止され、官書局となり、やがて京師大学堂に併合された。

第二項では、上海強学会を取り上げた。上海強学会は、変法自強を意図し、光緒22年(1896年)上海に設立されたもので、志士の集中、人材の養成、器物の収集を重要視し、欧・日の図書の翻訳、印刷、新聞発行、図書館、博物館の開設に重点を置いた。参加者は、6品以下の下級官僚により担われ、派別として右派、中間派、左派から構成されており、出身地域は、浙江、広東、江西、広西、福建にかたよりが見られた。また、上海強学会は弾圧され、『時務報館』となった。

第三項では『強学報』を取り上げた。

『強学報』は、上海強学会の機関誌として、変法を意図して上海跑馬場西首王家沙1号に1896年1月12日(光緒21年1月28日)に第1号が発行されたのであった。

3号まで発行されたようであるが、現在するのは2号であり、組織としては、主筆、帳房、書写、翻訳が置かれた。

内容としては「本局告白」、「上論」、「論説」、「学会文件」などが見られた。本小論では、特に論説のうち「開設報館議」と「変法当知本源説」を取り上げた。

前者は、全国に報館を作り、民智を開き、変法を行い、中国を近代的な国家にしようとするもので

あった。後者は、科学を改革し、変法を行い、大衆を合して新しい国を作ることをするものであるものであった。

参加者は、40名以上おり、康有為、梁啓超を中心として6品以下の変法各派によって構成されていた。出身地としては浙江、広西、福建にかたよりが見られた。

その意義としては変法の鼓吹により近代的国家を作ろうとした所にあったと考えられる。しかし上海強学会の弾圧によって『強学报』は、『時務報』に接続して行くこととなった。

第四項では、南学会を取り上げた。まず湖南省と変法運動について考察したが、変法時期には、湖南省に変法派の官僚が多く派遣された。南学会は光緒23年(1897年)湖南省に設立されたもので、議会と学会を一つにした半官半民の組織であり、南学会設立以後、湖南にできた学会、学堂は、その分会となり、南学会は、湖南省変法運動の中心的役割を果たした。湖南省は、最も学会の数が多く、北京と上海で設立された学会が、はじめて土着化して変法の実をあげた省であった。南学会の参加者は、ほとんどが6品以下の中下級の官僚と郷紳であり、その数は、千数百といわれ、その指導部分は、派別としては、変法中間派と左派にかたよりが見られ湖南出身者が多かった。

第五項では、『時務報』を取り上げた。時務報は、光緒22年(1896年)、上海で、汪康年、梁啓超、黄遵憲などにより発行が開始されたものであった。時務報は、役員や配布所の組織があり、資金面では、上海強学会の残金、寄附金、報紙代でまかなわれた。

その内容は、論説、論摺、各国の新聞の翻訳、学会、学堂等の紹介が載せられ、変法が鼓吹された。執筆者は、梁啓超、汪康年、麦孟華等が多く書き、参加者は、広東、浙江、江蘇にかたよりが見られ、中下級の官僚が多く、派別では各派が参加している。光緒24年(1898年)『時務報』は、『昌言報』と名前が変えられ、別の性格のものとなった。『時務報』の意義は変法の鼓吹にあった。

第六項では、『湘報』について取り上げた。湘報は、光緒24年(1898年)、『湘学报』について南学会の機関紙として、変法を鼓吹するために湖南省に設立されたものであった。熊希齡が責任者となり、譚嗣同、唐才常によって、組織、運営された。その執筆は、譚嗣同、皮錫瑞、唐才常、樊維、何来保が中心であり、湖南省の変法と資本主義化により、同省、さらには中国を富強な独立国にする論説が見られ、公牘類の転載、学会、学堂、公司等も見られた。参加者は、変法左派であった。『湘報』の意義は、変法鼓吹により、湖南省ならびに中国の近代化に一定の役割を果たしたことであろう。

第七項として『国聞報』を取り上げた。

まず、『国聞報』は、1897年(光緒23年)イギリスのタイムズに似せ、上下の情と中外の国交を通ずるために、天津に創刊された。その組織と機能については、「国聞報館章程」によって知られる。それによれば、まず、日報の『国聞報』と旬報の『国聞彙編』があり、上論、ロイター電、本館主筆の論説、天津本新聞などが取り入れられていた。

『国聞報』の内容としては、日本に『国聞報』がないので、『国聞報』の論説をまとめた『国聞報彙編』によって検討した。まず、国内問題として、「論中国之阻力離心力」、「論滬上興女学堂」、

「論保国会」を考察し、各々が主体的に中国を良くしていかなければならないと倡えていることが明らかになった。国際関係では、「西学通門徑功用説」を取り上げ、ハックスリーやベーコン、欧米の自然科学、社会科学について触れた。最後に訳稿についても言及した。

『国聞報』の参加者は、天津を中心とする学堂の総弁、学生などが主であり、出身地としては、浙江、福建にかたよりが見られた。『国聞報』の意義としては、国内の上下の情を通じ、内外の国交を通じて、各人が主体的・合理的に中国を亡びから救い、立憲君主制を行うことが唱かれ、当時の中国人に大きな啓蒙的な役割を果たしたと思われる。

第八項として湖南課吏館を取り上げた。

湖南課吏館は、官吏の実学的な専門知識をたかめ、ひいては、紳智や民智をたかめるために、1898年（光緒24年）2月、湖南省の府城の中央に設立されたものであった。

その機能は、章程により、知ることができる。役員としては、総理、問治堂館長等が置かれた。また、館中の仕事としては、学校、農工、工程、刑名、緝捕、交渉の6部門が取り上げられていた。課吏館には、図書館が設けられ、官職の上下を問わず、平等に閲覧に供されていた。学習時間は、午前9時から12時までであった。問治堂館長や総理は、学習者と面接し、館長は、学習者の質問に答え、それを選んで刊行し、総理は、学習者に適宜質問をした。

課吏館の経費は、最初、旧来の課吏館の経費が当てられた。館長にも給料が支払われた。学習者には、成績に応じて、奨金が支給された。館中の費用は、提調が総理と相談して使用した。なお、開弁に当っては、書籍等のために銀1,000両が用意された。

参加者は、変法派の派別から言えば、変法中間派から右ということになるだろう。出身地域は、広東、江西であり、その他の学堂、報館、学会とも相関関係が見られる。官職は、地方の上層官僚に傾きが見られる。その他、候補官の役員や学習者達がいた。

湖南課吏館の意義は、変法思想と普及を背景とした、実学の研修による官吏の再教育にあり、変法思想が根づいた湖南省独自の機関であった。梁啓超は、これを貴族院になぞらえている。

第三節では保国会を取り上げた。保国会はドイツの膠州湾占領後、中国分割の危機の中で、自らの国土を保全するために、強学会の再成として、光緒24年（1898年）、北京に成立したものであった。保国会は、總會、分会、役員組織を持ち、保種、保教、保国のすぐれて政治的・民族的な章程を持っていた。その参加者は、中下級の官僚、挙人層であり、派別としては、中間派と右派とで構成されており、出身地域も全国各省に分布していた。三石善吉氏は保国会を中国最初の地主の圧力団体政党と考えておられる。